

学生国際協力団体 CHISE

(CHISE：北川愛夏、原田雅子、岸田夕奈、森菜々子、申田裕大、宮城ひなた、川原玲奈、西尾美羽、橋本玲華、門傳みこ、乾美紀)

1. CHISE の設立の歴史

学生国際協力団体 CHISE (チーズ) は、ラオスの子どもたちの教育環境を改善することを目的として 2009 年に設立された。CHISE は、Children, Hope, Immortal, Smile, Education の頭文字を取った言葉で、「チーズ」と読み、『「はいチーズ」の一言で世界に広がれピースの輪!』をコンセプトに活動を展開している。現在のメンバー (15 人) には多くの県大生が含まれており、乾先生が顧問を務めている。

具体的な活動地は、ラオスの山岳地帯に位置するルアンパバーン県の郊外にある農村地域である。これまでに CHISE は小学校の校舎を 4 校、幼稚園を 1 校完成させた。校舎建設が決まると、地域の教育事務所や村と MOU を結び、原則費用を村と折半して学校建設を行ってきた。資金は募金、クラウドファンディング、学祭の出店などで集めている。

2020 年以降、感染拡大と渡航禁止のために現地訪問ができずにいるが、現在も活発にオンラインで活動を行っているため、以下に報告していきたい。

2. 具体的な活動の内容

現在、CHISE は毎週日曜日の午前中にオンライン上でのミーティングを行っている。ミーティングでは、主にラオスの村で行う教育支援について話し合っている。例年、年に 2 回ラオスへのスタディツアーを実施しているが、昨年度に引き続き今年度も現地での活動ができなかった。今年度はさらに、現地の通訳コーディネーターや教育事務所の担当者がコロナウイルスに感染したり、村から村にも移動できない厳しいロックダウンが敷かれたりしてオンラインスタディツアーさえもできない状況が続いた。

しかし、2022 年 2 月には、3 度目の延期を経てオンラインで授業やインタビューを行うスタディツアーを企画・実施することができた。

CHISE は現地に行けなくても国内での活動に力を入れている。国内での取り組みとしては、外国にルーツのある子ども達が通う城東町の補習教室でのイベントへの参加・出し物の企画、ラオスの大学生や他の国際協力団体とのオンライン交流、日本に住むラオス人との交流などを行ってきた。

また 4 年前から支援を受けている SEN 姫路ゾンタクラブから、お菓子の寄付を受けたことをきっかけに、それらを販売し、売上金をラオスの校舎建設の資金に

充てるという資金づくりの活動も行った。販売場所の確保のため、メンバーが工学部・環境人間学部の生協、フードロス削減ショップである ecoeat 姫路二階町店に働きかけ、販売が実現した。



図 1：日本に住むラオス人との交流の様子 (2021 年 11 月)

またメンバーそれぞれが家族や友達、出身高校の先生やアルバイト先に声をかけての販売も行った。その結果として、お菓子の売上金は 49,475 円、ecoeat 姫路二階町店に置いて頂いた募金箱や活動を知ってくださった方からの募金額は 38,252 円にのぼった。これらの利益は全て、今後のラオスの校舎建設のための資金として使う予定である。またこの活動は、神戸新聞 (姫路版) に掲載され、CHISE について、地域の人に知ってもらえるきっかけとなった。



図 2：活動に関する新聞記事 (2021 年 12 月 5 日 神戸新聞姫路版)

3. 現地のラオスの子どもたちとの交流内容

例年、ラオスでのスタディツアーでは、様々な道具を使った遊び、理科の実験、衛生の授業などを行っている。授業は、ラオスの子どもたちが普段の授業では学ばないことを身につけられ、想像力や発想力の活性化につながられることを目的としている。

今年度のスタディツアーも昨年度に引き続き、オンライン開催となったため、オンラインであっても子どもたちに楽しんでもらえる授業をメンバーで話し合い企画した。主な授業内容としては、日本の文化について知ってもらう日本の紹介クイズ、リアルタイム中継での日本の景色の紹介、言葉の教え合いなどである。授業は、こちらから一方的に知識を伝えるだけでなく、オンラインであっても子どもたちとのコミュニケーションを多く取れるように工夫をした。

また、日本の景色をリアルタイム中継で子ども達に紹介するのは、初めての試みであった。その方法としては、大阪に住むメンバーの一人がスマートフォンで外の高層ビルやショッピングモール、モノレールなどのラオスとは違う日本の都市の様子を見せ、子どもたちに紹介した。また、実際にメンバーがモノレールに乗り、そこからの景色も子どもたちに見せることができた。子どもたちは、自動券売機でモノレールの切符を買う様子や道端の自動販売機を画面越しに見て、興味を示していた。ラオスにはない高層ビルやモノレールなどの日本の景色に子どもたちが釘付けになる様子を見ることができ、子どもたちが世界へと視野を広げられるきっかけになったことを感じた。



図3：子どもたちにモノレールを見せる様子
(2022年2月)

また、予め現地の通訳コーディネータに送金をし、オンラインで訪れた5つの村の子どもたちに文房具の寄付も行った。子どもたちがペンやノートを持って喜ぶ姿を画面しに見ることができ、日本からでもできる支援はたくさんあることを実感した。今後も、子どもたちとのつながりを大切にしたい。



図4：子どもたちとじゃんけんで交流する様子
(2022年2月)

4. 今後の活動に向けての課題

2022年2月現在、CHISEは11期として活動をしているが、代替わりで12期になれば、現地に一度も行ったことがないメンバーだけになる。その中でも先輩方が代々築いてきたCHISEを引き継ぐことができるように、実際に現地に行ける日が来ることを願いつつ、日本にいながらできる支援について、さらにメンバーで話し合っていきたい。

また今回のオンラインスタディツアーでは、新たに支援を検討している学校の見学をすることができた。今後は、その学校の情報を収集していくとともに、現地に訪問できなくてもできる支援の在り方を確立し、6校目の学校建設に向け、ミーティングを重ねていく予定である。また、今まで支援を行ってきた村の子どもたちにも、より良い教育環境を提供できるよう、継続的に交流や支援を行っていきたい。

最後になるが、いつもCHISEの活動を支援して下さるSEN姫路ゾンタクラブ、お菓子を寄付して下さった丸中製菓株式会社、販売活動に協力して下さった大学生協、ecoat姫路二階町店に感謝を伝えたい。また新聞記事掲載後に大学宛に寄付を送って下さったり直接届けに来て下さったりした地域の方々にもこの場を借りて感謝の意を表したい。